

DRDN

災害出動システム

2025



NPO 法人災害救助犬ネットワーク

東京都渋谷区神宮前 6-23-4

03-6691-0488

info@drd-network.or.jp

<http://www.drd-network.or.jp/index.html>



NPO法人災害救助犬ネットワーク
DISASTER RESCUE DOG NETWORK

出動システム

災害が起これば次のモデルを基本として出動対応するようにしています。出動要請（各行政・救助部隊等）があれば、その要請先を優先します。

現時点では要請がある可能性は低く、出動モデル3として現地到着過程で連絡できる救助機関と連携する模索して機能的に活動できるようにしていきます。

災害救助犬チーム間では現場連携することを基本として対応していきます。



■ 出動モデル2 (2024～能登半島地震の教訓からの進化形)

群馬県モデル
サーチ&レスキュー
DRDNは提案します

群馬県緊急消防援助隊

群馬県隊救助部隊派遣チーム

サーチ&レスキュー部隊

災害救助犬ネットワーク等(SST)

群馬県 消防庁 内閣府 外務省
緊急災害対策本部

出動協定

駐日スイス大使館

能登半島地震での教訓から県警援隊との大きな連携に拘っていても想定外の現場に即した柔軟な対応が難しく、実務的なモデルとは言い難い。現場に行くだけでなく活動するためには臨機応変に対応できる専門部隊との連携やオペレーションの仕組みが必要であると考え。

災害救助犬を必要とする現場へ！

- 消防庁
2022年6月通達にある関係機関等との連携の弾力的な運用と実践を提案し続ける。
- 群馬県緊急消防援助隊
形式的、硬直的な部隊対応ではなく現場状況に臨機応変に対処できる構造的な変革を試みる。
- 群馬県
国の救助体制における空白状況を看過せず、出動協定に基づいて官民モデルを積極的に試行する。
- 県隊救助派遣部隊
平時からサーチ&レスキューの連携訓練を続け効果的に現場活用できるように準備をする。
- 救助犬組織
災害現場では救助犬チームとして活動することの社会的使命を果たせるように率先して示していく。
- REDOG
DRDNと連携する協定に活かし現場活動の在り方を実践の中で示して救助犬の認知を高めていく。

群馬県モデルをさらに実務的に進化させることを考えました。

能登半島地震で群馬県緊急消防援助隊と集結地の金沢競馬場で合流できたが、道路啓開が進まず、大型車両が通行できない状況で群馬県モデルを実践できなかった。やむを得ず DRDN だけで珠洲へ向かいました。

しかし、現場では消防救助隊はおらず、受援地オペレーションも機能的とは思えず、待機が続き早期に駆け付けたことに意味を得られなかった。この教訓から、群馬県モデルにも現場状況に臨機応変に対応できないウイークポイントがあると感じ、災害救助犬の活用を考えている消防とともに、現場からの視点として柔軟に対応できる仕組みを提案し、進化させたモデルを模索して行くことにしました。

県緊急消防援助隊には消火、化学、救助、土砂、救急などの部隊の合同部隊であり、車両も人員も多く小回りが効かない。この大部隊が珠洲や輪島に入ることは物理的に無理があります。人命救助活動に力点を置くならば、救助部隊(6名程度1小隊)だけでも動けるようにならないものか。

災害救助犬とも帯同できる方策を考えましたが、消防が動かす仕組みが硬直的で、現場に即した臨機応変な判断、行動ができにくい仕組みとなっています。

最前線においてはその部隊に現場に即した裁量権があつて然るべきと考え、群馬県モデルを柔軟的に運用するスキーム、アイデアとなっています。



■ 出動モデル3 (2024～能登半島地震の教訓から改訂)

出動時に救助隊と帯同できなかった場合、災害救助犬だけで現地へ向かい活動基盤を整える必要があります。活動することになれば、何れの場合も災害救助犬現地本部の設置し、連携の有無に関わらず、有効で機能的な現場オペレーションができるようにしていきます。



情報収集・分析(被災状況、エリアマップ、ドローン映像、本部会議等)を行ったうえで次のような項目の確認を行い対応します。

- ① 指揮統制(頭数、人員、特性に基づきチーム編成、部隊長任命、権限明確化等)
- ② チーム編成(1ユニット:3頭5名)+連絡員、記録
- ③ 本部装備(作業装備、蓄電池、マイク、無線、記録用品一式等)
- ④ 安全管理(PPE、保安用具、保険、救急品、無線、管理者等)
- ⑤ 災害本部との調整(要救助者の探索の必要性がある場所での救助部隊と連携)
- ⑥ 救助隊との調整(72時間以内で活動すべきスキーム)
- ⑦ 活動計画(本部において情報収集に遅れが生じれば自ら収集活動)
- ⑧ 行動管理(24時間体制での作業体制、待機、活動場所、状況は常時把握)
- ⑨ 装備保全(炊事宿泊、燃料、水、汚水などの確保、後続部隊への補給手配)
- ⑩ 報道管制(外部への情報発信、広報は本部に一元化)

以上のようなオペレーションが整わなければ現場探索を救助、救命に繋がれないと捉え、現場の一翼として作業に入る前の重要なスキームであると考えています。

ここに合流する災害救助犬チームとは、部隊、体制(人員、頭数、特性、練度)、期間、装備等を踏まえ効率的な運用ができるように協同していきます。

条件が整えばDRDNが現場統制を行う枠組みの下で活動することもあります。

■DRDN 出動フロー

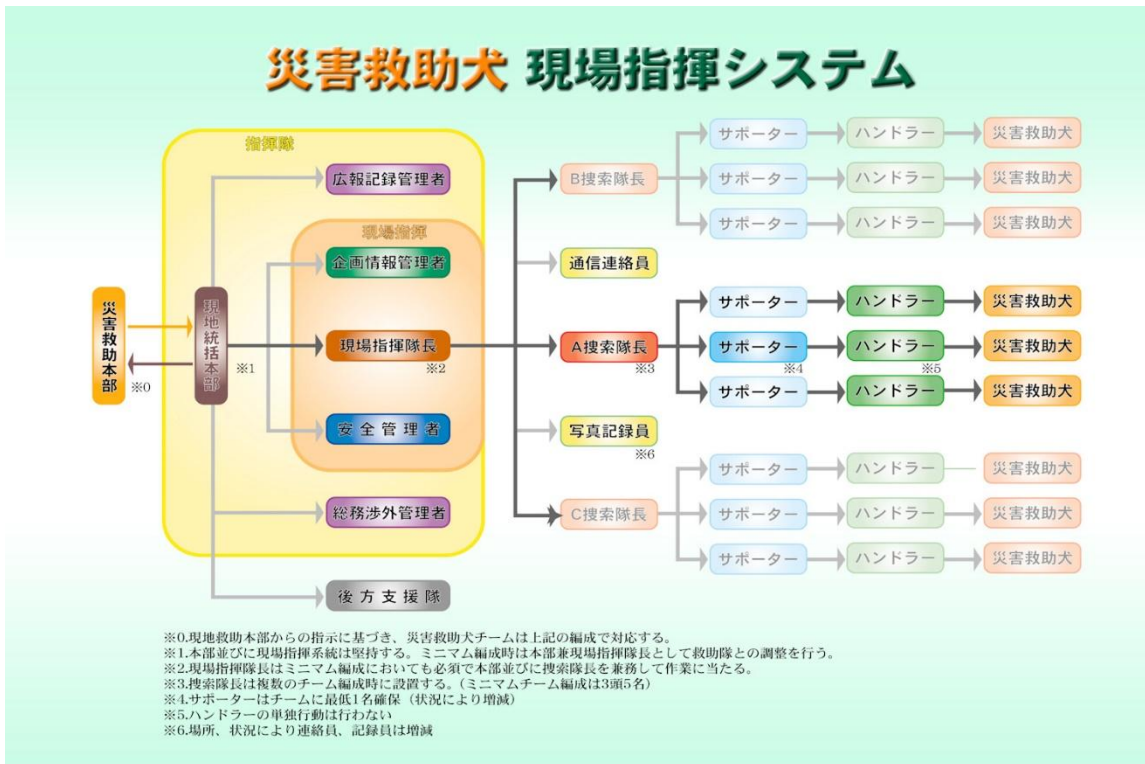


| 項目 | 出動チーム | 事務局 | 備考 |
|-------------|---------------------|--------------------|-----------------------|
| 出動待機 | 出動する前提で各自準備（1時間以内） | メンバー連絡、情報収集、関係機関連絡 | 装備、燃料、食料、水、地図、情報 |
| 出動 | 1時間以内に出発し、指定された集結地へ | 出動者の到着時間の把握、物資の確認 | 現場チーム体制、現場情報、WhatsApp |
| 集結地 | 時間差集結になればチーム分割 | 被災地へのルート、後続チームとの交信 | 実績、交流のある救助機関への交信 |
| 被災地 | 災害本部と折衝し、本部指揮内で連携 | 自治体、災害本部との交信 | 衛星、携帯、無線、SNS |
| 現場活動 | 消防救助隊と連携、独自の情報収集 | 活動状況の把握、情報発信 | 被災地情報収集 |
| 撤収 | 要救助者探索の必要性で判断 | 全帰路ルートの情報収集・提供 | マスコミ対応 |

- 出動チーム体制を明確にする(事前にDRDN体制、現場は作業に対応)
- 出動チーム(責任者)と事務局は情報を共有する
- 事務局は常に情報(被災地、行政、動向)収集する
- 出動チーム内は情報を共有する
- マスコミ対応は現場責任者に一元化する
- 活動状況、連絡チェックは定時に行う(責任者、事務局共有)
- 情報は事務局に一元化する(現場状況、対外的な情報などを含め)



■現場指揮システム



現場では機能的で秩序ある災害救助犬チームでありたいと思います。

どのような役割を担うことになるのかは出動メンバーによって現場統括者が決定していきます。

DRDN 単独で活動するか、他機関と連携するのかわかりませんが、出動した以上、成果も問われますが、それ以上に現場での行動は対外的に評価される対象になります。

幸い DRDN ではサポーターへの認識度も高く、さまざまな対応力があると思っていますので与えられた役割で人命救助に貢献できるようにしていきたいと考えています。要救助者の見落としが起らない精緻な作業ができる体制で搜索作業に臨むようにします。



チーム編成図

